

音（音楽）の世界から見る幼児の表現性とその身体 —— 遊びの世界と環境 ——

吉仲 淳

〈要旨〉

筆者は子どもの表現とその身体性にこそ、今日の保育における課題があると考え、子どもという普遍的なアイコンとその地域が持つ教育力との関係性を探るべく、様々な地域に息づく子どもという特有の存在感を「身体」というこれまでの研究キーワードとともに「遊び」「環境（人的環境も含む）」という観点からも検討しながら視察報告を行う。また筆者の記録ノートから視察時のエピソードも紹介しながら、保育の基盤となる理念とその課題について、音（音楽）表現の観点から捉えながら、所感を述べるとともに考察する。そして筆者が命題とする本来的な音楽の在り方についても検討を重ねていく。

キーワード：表現 身体 遊び 環境 イメージ

はじめに

ここ数年のあいだ、こども研究に対するアンテナの感度がとてもよく、かなり活発な働きを見せている気がしてならない。

本研究の計画当初、筆者を含む4名のプロジェクト研究員のあいだで様々なことについて話し合われた際、確認されたいいくつかの事柄があった。それらは、子どもに対する考え方であり、これから始まる研究の根幹を成すものであった。

各研究者の専門領域における様々な視点から、子どもという存在について話し合われたわけであるが、その中のひとつに、「保育実践の場というものは、子どもにとっての生活の場である」ということがあった。そこで本研究を推し進めるにあたり、実際に保育が行われているいくつかの地域に赴き、その実践における様々なアプローチを見学することが必要不可欠なのではないかという結論に至った。

筆者自身にとっても、このようなポイントをあらためて考察することは重要であると捉えた上で、保育の形態や担当する教職員の在り方だけではなく、保育が実践されているその地域の風土や環境、そしてそこに根づく文化などとの関係も捉える必要があることを常々考えていた。またこれについて、各研究員の持つそれぞれの専門領域の観点から意見

を出し合うことによって、保育における今日的な理念と課題が見えてくるのではないかと考えたのである。

今回の研究に当たって、視察を受け入れてくださった方々との出会い、そして与えていただいた数えきれないほどの重要な経験に対して感謝するとともに、この経験は、今後も継続していくであろう幼児の音楽教育を中心とした子ども研究にとって大変重要な基盤になると信じている。

1. 本研究の目的および方法

1) これまでの経緯

筆者は、これまでに関わってきた教育実践（幼稚園、大学他）における活動内容やそのアプローチをあらためて考察することにより、幼稚園で日々生活する子どもや指導する側である幼稚園教諭、あるいは教育実践現場での子どもとの関係を夢に描きながら教職を志す大学生にとっての表現領域の在り方や意義、教育現場において子どもたちの表現活動を支援している側（現職教員）のスタンスなど、多角的に芸術表現領域の研究を重ねてきた。そして現在においても、大学や保育実践現場でのアプローチを繰り返しながら、子どもなど指導を受ける側にとっての最善な創作の場、すなわち音楽表現遊びの環境やプログラム開発、教材研究などについての実験的試作を行っている。

これまでの実践を通して、筆者は、幼児教育における音楽表現領域とは（今日的な言葉で述べるならば）間領域的な活動であり、学際的なフィールドに所在するものであると考える。そのキーワードを「身体」とした上で、音楽の学問的知識のみに囚われることなく、各自が持つ身体（からだ）や相互に共有できうる共通感覚（間身体的な事柄など）を媒介として、創造表現活動を展開するべきであるということ。またその環境における子どもは、教える側が与えたルールやノウハウだけに縛られることなく、子ども自身の生活において経験してきた間身体的共通感覚素材を音楽表現活動に用いることなどについて、芸術表現教育における身体知試論として研究発表をしてきたのである。

また、教員養成のための音楽関連科目における大学生との関わりから、今日の音楽教育において最も重要なものでありながらも忘れてしまいがちな「自己を表現すること」についての考察を重ねるとともに、そこから見える本来的な音楽の在り方を検討してきた。

2) 本研究の目的および方法

本プロジェクト「子ども ―保育の理念と課題―」での今回の視察において、筆者自身の掲げた研究分担である「音（音楽）の世界から見る幼児の表現性とその身体」というテーマについて、特に音楽教育と直結する情報はほとんど得られなかった。

しかしながらその伏線となるような、古くからその地域に息づく風土や文化などが溢れる保育実践を視察することができた。これは、いわば音楽教育における重要な基礎的な研

究領域となるのであろう。また視察した保育実践には、環境を考慮した今日的な保育理念が流れていることを感じたのも確かである。

筆者は、子どもの表現とその身体性にこそ今日の保育における課題があると考え、子どもという普遍的なアイコンとその地域の関係性を探るべく、各地域に息づく子どもという特有の存在感を「身体」というこれまでの研究キーワードとともに「遊び」「環境（人的環境も含む）」という観点からも検討しながら視察報告を行う。また筆者の記録ノートから視察時のエピソードも紹介しながら、保育の基盤となる理念とその課題について、音（音楽）表現の観点から捉えながら、所感を述べるとともに考察する。そして筆者が命題とする本来的な音楽の在り方についても検討を重ねていくこととする。

2. 研究成果報告

その1 これまでの研究に至る経緯：基本的な考え方とスタンス

1) 「創作・教育」という二足のわらじ

筆者は、教育人間科学部教育学科において、教員養成（幼稚園、小学校教諭）のための音楽関連科目を担当している。また学外においては、長年にわたり音楽家（作曲家）として、音楽作品の制作や演奏などに携わる一方で、幼稚園などの教育現場において音楽活動（作曲などの音楽作品の制作）を子どもたちと行い、様々な教育的アプローチや指導法などの実験的試作を繰り返すことによって、音楽表現の意義を模索し続けている。これは「創作・教育」という両輪の存在に関して、何かしらの関連性を感じながら活動をしていること、すなわち二足のわらじを履いているという状態であることを示す。

しかしこの二足のわらじは、音楽の世界においてあまり歓迎されないようであることも筆者自身は認識している。どのようなものであってもより高度な専門性を有することが必要とされる領域であれば、違う二足のわらじを履くということは当然、否定されないにしてもあまり良い印象ではないに違いない。音楽もまさにその例に洩れず、たとえば「良い演奏家は、かならずしも良い指導者とは限らない」ということが定説となっているほどである。

そしてこれには、音楽家がある認識を持って教育される中で伝承されるプライドの存在がある。このプライドは良い意味でも悪い意味でも、日本の音楽界や音楽教育界をこれまで牽引してきたことは事実であろう。それは「音楽をすること」とは、すなわち「演奏をすること」という認識である。

たとえば音楽大学で学ぶ学生のほとんどが、自分自身のあるべき姿（将来の職業）として、当たり前のように演奏家あるいは作曲家を目指す。学生はその目標を目指すために、まず必ず教育を施す役割である「師」がいる環境、すなわち師事する演奏家や作曲家であ

る教授などの門下生となり、「師」を手本として学ぶわけである。「まねぶ」という言葉からもわかるように、実践的領域を学ぶという見地からいえば、この方法はごくあたりまえのプロセスなのである。音楽の本来的な在り方を考えつつ、その醍醐味を考慮すれば、それはある意味、第一の希望となり得ることは理解できる。しかしそのような環境においても、教えるという本来的な行為やそのプロセスに魅了されることはなく、またこれまでに行われてきた教授法およびその考え方には、いささか疑問を感じざるを得ないのも確かである。「才能か？ 努力か？」「genesis? or structure?」「卵が先か？ にわとりが先か？」というような音楽、あるいはそれ以前の根幹をなす大きな問題が背後に立ちだかっていることに気づく。

日本音楽療法の父であり、音楽教育においてヒューマニスティックな視点を吹き込んだ櫻林仁は、自らの著書において「日本の音楽教育は明治以降、西洋からの音楽教育が導入されて以来、テクニクによる音楽ライヴァリズム（競合性）重視の成果主義である」と述べているが、このことからそのプライドの伝承が読み取れる。また「音楽性」という曖昧な言葉を珍重し、音楽そのものが捉えにくい神秘的な領域へと追いやったことも確かである。

先にも述べたように、音楽大学のような環境においても、音楽を教える教育者という役割は、とにかく二の次というか、事実上演奏家になれなかった場合の逃げ道、すなわち滑り止めとされてきた風潮が強い。このことは音楽をテーマにした漫画「のだめカンタービレ」にも時折登場するような考え方である。またこの考え方は、音楽大学受験においても一次志望を決定する際に考慮されるポイントのようである。

音楽を志すものにとって、このような昔からの認識、すなわち二足の違ったわらじである創作（演奏や作曲など）と教育というものの性格上の違い、音楽の中でのスタンスや価値観、一般的な優先順位などの相交えることのない考え方が、社会通念のような形で常に存在していたわけである。

では何故、筆者は今もなお創作と教育という二足のわらじを履き続けているのか。

そこには、長年筆者自身が持っている音楽に関する命題ともいえる問いとの密接な関係があると考えることができる。それは筆者にとって、「創作の場」「教育の場」という境目なしに行っているすべての音楽表現の根幹を成すものであり、無論、今回の研究も含むすべての研究に対する動機にもなる大変重要なものである。

以下に示したものが、音楽家であるがゆえの命題ともいえるべき問いであり、筆者が常に持っている筆者自身に対する問いかけでもある。

「音楽とは何か？」

2) 音楽家であるがゆえの命題

Music is enough for a lifetime, but a lifetime is not enough for music.

音楽は、一生をかけて行う価値のあるものだが、
人間の一生は、音楽を理解する上で十分な長さではない。

S. Rachmaninoff (1873-1943)

これは、ロシアのピアニストであり作曲家、指揮者としても活躍したセルゲイ・ラフマニノフ (Sergei Rachmaninoff 1873-1943) の言葉である。

「音楽とは何か？」という命題と常に対峙しながら自己との対話を繰り返すということは、この言葉のとおり、音楽家である筆者にとって一生をかけても取り組むべき課題であり、おそらくは生涯において答えが出ることのない終わりなき旅のようなものであるに違いない。まさに暗闇の大海を進むが如くの心境である。

この大きな問いについて考えるに当たっては、そもそも音楽を制作するということについての筆者自身の考え方が、この難題に正面から向き合うための立場や方向性を示していると考えられる。それは、音楽によって他者との共有を図るとき、本来は自分自身が行うその作業を見せたり、あるいは共有を図る他者との主観をぶつけ合うような作業を共に行うことは可能であっても、他者の意図などを考慮せずあたかも誘導するかのようになり、ただ指導することは出来ない、と常々考えていた。何故なら、そのように自己が最優先とされる創造する場においては、他者が持つ主観などによって影響されることはあっても、安易に侵されることのない自己表現の場であるということ。またそれは、他者を知る場であると同時にその空間は、自己を写す鏡でもあると捉えていた。この音楽に対する基本的なスタンスは筆者にとってコアなものであり、現在においても変化はなく、ゆるぎのないものであるからだ。

あたかも暗闇の中で行われているかのようなこの問いかけも、筆者自身がこのスタンスを崩すことなく、境目のないこの二つの場「創作・教育」において活動を展開し続けた結果、わずかながら解決の光が見えてきた実感がある。そして今日、少しずつではあるが、確かに得られた答えのような二つのものを、まずここで紹介する。

一つには、筆者が行っている音楽が何であるか？ どこから来るのか？ というような問いに対しての答えが筆者自身、未だわからないということがわかり、二つめとしては、それをわかるためのヒントは、今後も様々な音楽的表現を捉え、音楽を通して人間との関わりを理解するということにあるということ。そして特に子どもの世界に大きなヒントが隠されているのではないかということが日々の音楽実践によって、ほんやりとではあるが少しずつわかってきたのである。

その2 今日の保育を探る：2つの園での事例をもとに

ここで、今回の研究視察を通して得た所感などを述べながら、今日の保育に必要とされる理念について考察するとともに、先に記した筆者自身の命題を解き明かすためのヒントにもなるであろう芸術と子どもの世界との関連について考えていくことにする。

1) 芸術と子どもの世界との関連性

音楽や美術など、特に現代芸術の歴史（おおよそ1900年初頭から現在に至る）の中で、様々な作品が制作され、芸術家が持つ表現の可能性を探るべく実験的な取り組みが行われた。それは、例えばパフォーマンスインスタレーションのように他の芸術領域とリンクさせ、新たな領域やジャンル化を図るものや、科学的、あるいは数学的に情報処理を施すもの。またコンピューターの開発に伴って発展を遂げているようなミクストメディア（マルチメディア）アートなど。そして既成概念や固定観念などを淘汰し、芸術の在り方や考え方、あるいは捉え方などの根底を変えること、すなわちパラダイム転換することにより、社会的、あるいは文化面や教育にも影響を及ぼしてしまうようなコンセプトualでエポック的存在感のある作品まで、この100年ほどの間に様々な表現形態が出現したのは確かである。

しかし注目すべき点は、表現の形態としては新しくかつ衝撃的なものに違いないが、芸術家という人間の営みそのものは、それほど新しいものではないということである。

それは前述したような、芸術家によって芸術領域における思想や言語の拡張、または新たな表現の模索と称してあたかもいたずらのように実験を繰り返されている創作活動そのものが、たとえば保育などの実践現場において、当たり前のように繰り返されているごく日常の子どもの表現活動に似ており、それらは、何かしらの重要な関連性を持っているのではないかということなのである。

それは、世界に対して自らが関わって行こうとし働きかける姿勢やテンションそのものであり、それは、古来から何かを知るために自発的に模索する人間の姿そのものであるとともに、自己実現しようとする美しい人間の生き方そのものであるに違いない。

ニーチェの芸術に対する考え方について述べられた言葉をここに紹介する。

Art and nothing but art!

It is the great means of making life possible, the great seduction to life, the stimulation of life.

芸術、まさに芸術以外の何ものでもない。

芸術こそは生を可能とならしめる大いなる方法であり、大いなる生を魅了するものであり、大いなる生への刺激である。

Friedrich Nietzsche (1844-1900)

ニーチェは、芸術そのものが人間の生に対して重要な役割を示すと記している。またそれと同時に、人間としての生そのものが、芸術に対して可能としたり、魅了したり、活力となる方法や行為として存在するのであれば、それはもはや「芸術と同じくらい崇高である」あるいは「芸術そのものである」と言え、相互に働きかけていると考えられる。



写真は、飯綱高原にあるこどもの森幼稚園（園長 内田明子）で行われている園外保育「青さんプロ」での子どもたちの様子である。

「青さんプロ」は年長児のみが体験できるネイチャープログラムであり、4月から11月週一回のペースで、幼稚園から戸隠神社までの道のりを少しずつ分けて歩き切るという、森の幼稚園の環境を利用した保育内容である。



—筆者の記録ノートより—

青さんプロに一日同行する。子どもたちとおしゃべりする。

しながら森の中を歩き、蛇苺を食べ、カタツムリのデンちゃんなどいろいろな虫を発見しながら、戸隠神社の参道あたりまで来た。そこで昼食をとることになったのだが、数人の子どもたちは小川を発見するやいなや、お弁当もそこそこで靴を脱ぎはじめ、川の中やその周辺の散策を早速開始。川の水はかなり冷たい。その後ほとんどの子どもたちが合流して、石投げからダム作りへと遊びが展開していった。中にはズボンを脱いでパンツだけになって遊ぶ男の子もいる。先生方は、それを予想していたようで、あらかじめ着替えを持ってくるように指示をしてあった。また水遊びのあとに必ずといっても良いほどよおしてしまうトイレ：何処で、どのように用を足すかについても考えてあるようだ。

よくある指導の場合、時間などの都合を考えて「川には入らない」というような指示をしてしまいがちになる。

この幼稚園で最も大切にしている言葉の一つに、デューイのこの言葉がある。

「1オンスの経験は1トンの理論にまさる」

まさにそれを実践している。本来、保育はこうあるべきでは……

特に子どもにとって、発達や成長をもたらす世界の新奇性や不可測性に取りかこまれた冒険ともいえるような幼年期の日常生活の中で、子どもが日々対峙している世界に対しての働きかけと理解、すなわち上記に紹介したエピソードのように、まず川に入ってその水の冷たさなどを確認し、辺りを散策することから始まり、石投げそしてダム作りへと発展する遊びの変容を通して、自分自身が今ここでどのような環境下に存在するか、また取り巻く世界はどういったものであるかなどの課題に対する取り組みそのものが、現代芸術家の行う新たな表現手法の模索やその変容を繰り返してきたこれまでの経緯と類似しているのではないかということ、子どもに関われば関わるほど感じざるを得ないのである。

また筆者は、作曲や即興演奏などのアプローチを通して音楽作品を構成していく創作活動そのものと、子どもたちと音楽という創作の場を一つにしながら対話を重ねていく時間や空間が、まさに作品を制作するような時空感覚と同じであるかのように感じ始め、子どもたちとの関係を構築することこそが、ひとつの作品を創り上げるような感覚に取り憑かれているのも事実である。

次の写真は、「青さんプロ」としての園外保育の一日が終わるとき、担当教諭と子供たちが一緒に振り返りをしているところである。



—筆者の記録ノートより—

創作を通して子どもたちと対話することとは、その関係性によって、その深さが決定されるといっても言い過ぎではないと思うが、これはまさにに今日の道のり、ここにたどり着くまでいろんなことを共に経験してきたプロセスをふりかえる子どもと保育者の関係性を感じさせる空間である。担当の男性保育者「エテちゃん」の声は、あたかも同質の原理を考慮しているかの様な、ほんとうに穏やかな声質を使った柔らかい語り口調で、今日の心地よい疲れを共に知る仲間としての証であることを感じさせる。また子どもたちもそれを受け、少ない言葉ではあるが、思い思いに語り始めている。

ここに記録されたものは、筆者の主観的なものに過ぎなく、確実なものとして具体的にわかっていることや、何故この空間が価値あるものなのかということについては、まだまだ検討する余地があろう。しかし、筆者自身が最も重要であると捉えていることは、創作の場を共有する者のそれぞれの身体（からだ）が、今ここで同じ感覚を分け合おうとしている状態であり、芸術家である筆者自身の身体がそれを把握し、理解しようとしているこ

とについても、あらためてここに補足する必要がある。

2) 生きた環境とは：子どもが大芸術家になるとき

保育という子どもにとっての生活の場において、様々なものと向き合うことで、日々の発達という冒険を重ねるのであるが、そのような子どもの世界とは、たくさんの夢や持つことのできる空想やファンタジーの空間であると同時に、その夢やあこがれを現実のものにしようとする力強い創意工夫の空間でもある。その空間における営みは、人間として本来必要不可欠なものであり、基本的な営みを確保するための時間や空間についての在り方や考え方の元型が存在するのではないだろうか。しかしながら人間は、根源的なものであることを理解しながらも、時を重ねるにしたがって徐々にその存在価値や理由を忘れてしまうのかもしれない。

そこには人が人として世界との繋がりながら、全て持っている感覚を用いて主体的に生きるという人間さながらな原風景が感じられるのも、魅了されるひとつなのであろう。



「美は躍動なり」というニーチェの言葉がある。この言葉にある「躍動」とは、自分自身が対峙する世界から何かを受け取り、それに対しての印象や感じたものなどを伝えるというような相互のやりとりにおいて発信側、受信側のような役割交代が瞬時に繰り返される中で、感覚的に気づきが生まれるようないわば能動的な躍動感であり、そこにこそ美を感じるということなのであろう。

筆者が「創作・教育」の場においてこの言葉を思い出す時は、かならずといっていいほど生き生きと躍動する子どもの身体（からだ）を目の当たりにするときであり、何かを見つめるしっかりとした視線、声や汗、ダイナミックな息づかいなどから、そこに宿る生命を美しく感じてしまうのである。

写真は、沖縄視察において最初の見学地となった那覇市内、首里石嶺にあるみどり保育園（園長 石川きよ子）の園庭にあるガジュマルの木である。

—筆者の記録ノートより—

木の上の方から子どもたちの声がする。その姿は、木の枝葉に隠れていて下からではよく見えないが、木に登って行くとたくさんのキラキラした笑顔がそこにあった。「こっち、こっち」と木の上から気さくに声をかけてくる子どもたち。木に登って

ることがとても誇らしげな様子。園庭の入口に高くそびえ立つ立派なガジュマルの木も、我々の視察を歓迎してくれているよう。人と人とのあいだにできる垣根のようなものが非常に低く感じられる雰囲気。この園長の人柄なのだろうか。子どもも大人も、とにかく優しい。

石川園長曰く「当たり前のことができる保育園、普通の保育ができる保育園を目指している」とのことであった。併設されている子育て支援施設「なんくる家」の部屋でこの園について話を伺っているとき、時折吹き込んでくる風の心地良さは、ここの雰囲気を象徴するかのようである。そのあと、また園庭に戻り、子どもたちと木陰でゆっくりとおやつ時間を過ごした。

ここには、慌ただしく生きる我々が忘れてしまっている何かがあるような気がしてならない。たとえば東京のような大都市に住む生活において、この視察であらためて受けた感覚を取り戻すということは、今日において非常に難しいことなのかもしれない。

元来人間というものは、その土地に生活するものにとって、そこにある自然や風土から教えられることが多く、結果的にその教えは、子どもの育ちにとって、すなわち保育にとって自然などの環境から教えを受けることであり、とても重要なことであろう。子どもが自然からさまざまなことを学べる環境構成を目指し、ガジュマルの木の存在もいわばその一環であり、大切な役割を担っている。子どもたちは、このガジュマルの木に集まることで、あたかも木自体が子どもたちに優しく語りかけ、その存在そのものが、育つための環境を提供しているかのようである。まさに自然からの教えはゆっくりとした時間の中から生まれるものであるに違いない。

園長が語った「当たり前のことができる保育園。普通の保育ができる園」とは、すなわち人間が忘れてしまっているものを思い起こすというような保育なのではないだろうか。

日本における幼児教育の父である倉橋惣三が語った「子どもと青空と野原があれば保育ができる」という言葉がある。これは、すなわち子どもが子どもらしく生きるために、ゆっくりとした時間のなかで行なわれる自然との繋がりが、子ども自らをアクティベートさせ、主体的そして積極的に世界と関わろうする気持ちや環境を構成する。そしてその環境において子どもと関わる保育者の立場は、この倉橋の言葉にもあるように、たとえば澄み渡る青空のように、あるいは起伏があり、駆け巡ることのできる野原のように、子どもが自ら繋がろうとする生きた環境の一部となり、その歩みを見守る人的環境として存在することが望ましいのではないだろうか。

また倉橋は、著書『幼稚園真諦』において「生活形態をなぜそんなに重んじるのかというに、生活はその形態によってこそ、始めてその真実なる生活性を発揮し得るものであるからであります。生きているものは皆生活しているが、それが生活らしく十分に生活できるかできないかは、その置かれた形態によって支配されるものです」としている。つまり、生活へ教育を持ち込み、生活のなかに教育自体をギャザリング（織り込む）することこそ

幼児期において最も必要とされる環境なのであろう。それは、保育というものを我々が子どもと共に生きる場であると考えれば、それは必要不可欠でありながらも、今日において忘れてしまいがちなことでもあることは明らかである。子どもを取り巻く環境となりうる存在がしっかりとこのことについて受け止め、園そのものが子どもにとって自己充実力を十分発揮し、自己表現できる生活の場となることが最も重要とされるのであろう。

この園には、併設されている子育て支援施設「なんくる家」がある。この名称は、沖縄の言葉「なくなるさ：なんとかなるさ」からきており、若い親が抱える出産や子育てなどの問題やそのための生きる環境は、地域の人々との関係によってなんとかなる、解決できるということを伝えることを目的に、地域とつながるための情報や支援が必要な母親がそのような環境を求めて自由に集まれる場として設立された。

このように、この園では特に人と人のつながりを大切にしているのだが、一般の保育園としての立場であれば、たとえば人と人とのつながりの大切さを考える時、今日の社会的状況を考慮し、できるだけ保護者のニーズに答えるべく様々な保育サービスを提供するのであろう。しかし石川園長は、たとえば延長保育一つをとっても、その利便性がもたらす人間関係の形骸化や希薄になる関係性を指摘している。昨今の保育は、保育園の立場としてという形態を利用し、営利を目的したコンシューマーのニーズに応じた保育サービスを拡充しすぎる。そうしてしまうことによって、人が本来持っている思いやりや優しさが希薄になりかねないと危惧するのである。

すなわちここで求めているものは、今日の教育にもはびこる消費者意識や契約上の関係性、すなわちうわべや観てくれだけの教育ではない。この園では、子どもを中心とし構築される保育における関係以前の人間関係、すなわち地域における関係やその連携こそが生きる環境を作り、また保育にとっても重要になるということを考えているのである。

先に記したニーチェの言葉から考えるなら、躍動感あふれる真の人間関係こそが美そのものであり、子どもに対しての教育的効果は多大であるに違いないのである。

このように子どもの生活や環境を育み、子どもの自身を健やかに導く保育実践は、このような躍動感あふれる身体（からだ）や考え方そのものを優先し、こどもが発達という冒険を繰り広げることのできる世界をより深く幅広いものにしていく。なかでも創作の場においては主体性を重んじ、生活における知恵などを駆使した創意工夫の溢れる活動であることが理想とされ、その場こそが生活の場となっていくことにより、自分自身を生きることそのものが表現性を育むものであると考えるのである。そして子どもにとって表現とは生活そのものであり、子ども自身が世界と繋がり自発的に歩むための手立てとなるはずである。

保育は芸術なり、音楽や舞踏などの芸術より一段と高い偉大なる芸術なり。

小林 宗作 (1893-1963)

これは、日本に初めてダルクローズリトミックを幼児教育に導入、成城幼稚園や巴幼稚園、国立音楽大学附属幼稚園の創設に携わった小林宗作の言葉である。

保育が芸術であるということは、生活している環境そのものが芸術を生み出し、その生活の場において営みとともに表される人間さながらの表現やその存在感が芸術であるといえるからなのである。フレーベルやモンテッソーリは「教育は芸術である」と述べ、イヴァン・イリッチは「生活は芸術である」ともいう。これはまさに子どもたちが自然という生きた環境と主体的に、自由に繋がろうとする関わり方や意識そのものが、人間として生きるための表現は尊いものであるからこそ根源的な芸術、あるいは芸術の根源であるといえるのではないだろうか。

ここで、今回の視察を通してあらためて明らかとなった今日的な保育理念とその課題をいくつか提示し、考察する。

その3 問題提起として：今日的な保育理念とその課題

1) 表現を育む環境

先にも述べたような人的環境としてのスタンスを持った保育者は、まさに生きた環境の中で子どもの表現活動を支援することが可能となる。

しかし今日の保育実践においては、子どもたちの表現に寄り添う役割を担うはずであった保育者はあまり見受けられず、理想とは程遠い現実がそこに存在するのである。

保育を日々実践する者にとっての表現領域、中でも音楽表現活動は、不確実で曖昧な道のりに困惑してしまい、その道を回避するためにあらかじめ予想できる成果などを保育者自身が独りよがりに思い描き（落としどころ）、そこに子どもたちを当てはめるように教え込むばかりになりがちな現状がある。それはまさに子ども本位なものではなく、子ども自身が生きた環境との対話から引き出した独自の発想や考えなどに寄り添うことが切ないものである。前述したように、子どもにとって表現そのものが生活であるならば、保育者の身勝手な考えや関わりひとつで、子どもの生活や考え方、育ちそのものに影響を及ぼす結果となるのであろう。

芸術表現教育においてよく目標とされることに、「個性を育む」ということがある。それは子どもも指導する側も、お互いが個として同じ空間に存在するという気づきや認識、またそれを受容しあうことで取りまく環境を把握することが前提となる。すなわち他者である個の存在を認識するという他者理解を深めることにより環境を知り、はじめて自らについても気づくこととなり、自己理解が深まっていく。

個性と表現の間には、濃密な関係性が存在する。個性を育むということは、個としての

存在感が一人ひとりの特性として認められ、創作の場という同じ空間において相対する他者（個として認められた）からの確実な肯定感のもと受け入れられ、表現するための十分な自由が保証されるとともに、表現をするに当たっての自己責任が伴うことも前提となる。

しかし今日の保育において、子どもが自己を表現する時、はたして自由が十分に確保されているのだろうか。そのとき、安心を生む肯定感とともに認め合いながら表現できるような生きた環境は、どのように構成することができるのか。またそれを具現化できる指導する側が持つべき人的環境としての考え方やその身体はいったいどんなものであろうか。「子どもの生活自体には臭みはないが、幼稚園に入れられると幼稚園臭くなる」

この倉橋の言葉を思い出さずにはいられないのである。

2) 子どもらしさ

今日、我が国では、あの大きな災害によって未曾有の被害を被ったとしても、人々はまったく自由であり、豊かであり平和である。また社会は物質にあふれ、利便性に富み、知りたいことがあれば意図も簡単にその情報がまるで体験したかのように入手することができる。我々はそのような方法や道具を手に入れている。

しかしこれが子どもにとって、心身共に健やかな形で成長し、発達を遂げる環境であるかどうかは定かではない。現代社会では、本来的な意味を持った「子ども」という存在をあまり見ることができなくなったように感じる。子どもたちの生活の場から子どもらしさが、まさに消え去りつつある。

現代人の今生きているこの時代を大切にするという考え方は、まさに大人になってからの考えである。子どもにとって、子どもはどのように子どもであり、どのように生きていくかという論議は大人にとって二の次であり、とにかく子どもはできるだけ早く育つことが現代社会においては大前提とされる。すなわち一刻も早く大人になるということを社会から急がされているかのようなのである。

その要因として、近年、大人の世界で頻繁に取り上げられている「コンプライアンス」という考え方が、子どもの環境にも押し寄せているような気がしてならない。

この言葉は、特に創造性あふれる教育において、指導する側にもされる側にもあまり良い影響を及ぼさない。たとえば、ルール厳守の観点から指示することによって、子ども本位である活動を規制してしまうだけでなく、たとえば安全確保の観点からルールを厳格に遵守するような指導をすることにより、「これは危ない」という固定観念ができてしまいがちである。それを意図も簡単に繰り返すことによって、子どもの活動や発想は萎縮しかねない。結果として指導する側は、それによって誘導的に教育を推進できるような利便性を図ることが可能となる。しかしその裏には、おそらく固定化された目標設定とその成果によって評価するというような教育、すなわち指導する側が優位な管理教育となるわけである。大人の都合で子ども本来の健やかな成長を持たないこの状況は、まさに不幸であるといえる。しかし昨今では、子どもたちはこのような状況下において、すこしも不幸であ

るということを感じることはなく、かえって利便性に富み居心地が良いとさえ感じる者もいるようである。何一つ疑いもなく提示されたルールに従いそれを守ること、すなわち「聞き分けの良い子」になることが良い評価を生むというような構造化された状況をすでに子どもは知っており、その状況下で「無理なくしのぐ」ことが、自分自身の居場所を確保する手段であるかのように感じているようなのである。

筆者が関わる幼稚園においても、いわゆる「指示待ち」する子どもが増えている。聞き分けが良く素直なことはいいのであるが、とにかく大人しい。子どもが世界との関わりを持つための魔法の言葉「ねえ、見て！ 見て！」が昨今、実践現場において聞くことが少なくなった。すなわち自分から何かをしようとする意欲、あるいは自発性に乏しい子どもが目につく。また残念なことに、子どもが感動を表現することが少なくなったということも筆者は感じている。たとえば筆者が行う音探しや音遊びの実践において、「この音、きれい」「この音好き」というようなセリフをあまり聞かなくなってしまったことも事実である。

また大学においては、人間として日々あたりまえのように行うはずの営み、たとえば自身の感情に従って表情を作りながら気持ちを露出し、それを他者に伝えるというような自己表現、あるいは自分は何が好きでどうしたいのかという様なことがはっきりと表すことのできない自発性の乏しい「自己不在な学生」が見受けられる。また学生の中には、自分自身の意向を捨て、どのようなキャラクターを持てば、より良い評価が得られるのかなどの質問をするほどである。

筆者は、これまでに述べてきた今日の教育（保育）実践における課題にとって、「遊び」の必要性を感じている。ここで、一連のプロジェクト研究を通して、あらためて「遊び」の重要性を考え、その在り方と意義を検討してみたい。

その4 今日の課題に対する提案：「遊び」のススメ

「遊び」というものについては、これまでも論議を醸し出しながら、様々な領域観点からの先行研究が存在する。これまでも子どもにとって、広くは人間にとってその営みの重要性を考え、遊び本来の持っている意義を捉えてきた。

この主題について、人だけではなく我々の知る生き物、すなわちこの地球上に生きる動物全てにおいて「遊び」というものが存在すると捉えた上で、我々人間にとっての「遊び」の意味や在り方、その重要性について説いた書物がある。『ホモ・ルーデンス』である。

その冒頭において筆者のヨハン・ホイジンガは「……遊びは何らかの意味を持った一つの機能である。」と述べている。またその意味を解明するためには、遊びの面白さを解明する必要があるとも述べている。

なぜ赤ん坊は、喜びのあまりきゅっきゅっと笑うのか？ なぜ演奏家は、何かを見ているかのように悩ましい表情を浮かべ音を紡ぐのか？ 賭博師はその情熱のあまりのめり込

んでしまうのか？ 運動競技が何千という大観客を熱狂に駆り立てるのはどうしてなのか？

どれも自己の意識を高く持った迫力ある行為である。遊びとは本来、有り余る生命力の過剰を放出することであるならば、ここに挙げた状況は、まさに遊びの中にある行為と捉えることが可能となる。この力の放出、人間を夢中にさせる力にこそ遊びの本質があるようである。

またこの著書において、「遊びは、何かイメージを心のなかで操ることから始まる」とホイジンガは説いている。自分自身の中にあるイメージという、ただ世界からのある刺激として受けた印象を持つということだけではなく、能動的に自らがそれを操り、イメージの世界で様々に浮遊してみることが遊びの始まりであると捉えているのである。

佐伯胖は、本プロジェクト主催の講演会（2009年7月6日）：「幼児教育における遊びと学び」において、「遊び」「学び」「勉強」の関係性について語った。また、今日の一般的な認識として、特に「遊び」と「学び」の分離する時期とそれと同じくして使用される「勉強する」という言葉について言及した。「学ぶ（遊びを含む）」という行為に必要とされるイメージの構築は、まったく自発的な行為であり、根源的能動性を持ったものであるからこそ、そこに共感が生まれるのであるというイメージ論を展開した。その佐伯独自のイメージ論とは「擬人的認識論」といい、人が世界の事物（ヒトも含む）を理解するとき、自分の「分身」（コビト）を対象の中に派遣して、モノに「なって」、世界を駆けめぐり、モノの内側から、モノを取りまく周辺環境を（コビト自身の）「全身」で感じ取る（さわる、動かす、見る、見回す、など）というものである。これはいわゆる「コビトとばし」（コビト論）と呼ばれるものである。

この「コビトとばし」は、ホイジンガの述べている遊びの始まりとされる「イメージの操作」と共通点があると考えられる。

これは、芸術を実践する者にとっても同じことがいえるのであろう。たとえば服飾デザイナーや住居などの設計デザインを手がける建築家、ガラス職人などの工芸作家、彫刻家など、素材を知るという観点からみれば、まさにこれこそが作品制作の極意ともいえるのであろう。空間的に視点を移動させることによって素材などとの対話を重ね、それを通して自分自身や他者を識る（しる）ことにもつながる。そのようなイメージの空間に自分の身を置くこと、すなわち「なってみる」ことにより、自己や対峙している全てのものへの理解の深まり、広がりなどを持つということになるのであろう。

作曲家である筆者は、作曲を行う前段階としてプレ・コンポジションというものを行うのであるが、まさにこれこそが「コビトとばし」なのである。作品が依頼された（演奏される）場所に「行ってみる」、また演奏家に「なってみる」というようなイメージ空間でのコビトとばしを通して、その作品に必要とされる素材としての音やその性質を求めたり、あるいは今から書くその曲を、演奏家が演奏当日、いったいどのように紡ぎ出していく（演奏法）のかなどを、イメージの世界の中でケアリングを重ねていくというプロセスを

辿るのである。しかしこの工程は、自らが「やろう」「やらなければ」と意識しながら出来るものではないような気がしてならない。また目標設定が明確にあり、目的などが意識されすぎていても難しいのである。ごく自然に、自己の意識はなく、没頭している時間や空間の中で、これまでのプロセスがもたらした情報によって、あたかも導かれるように、誘われるように、より深いイメージの世界に没入し、構築されつつある作品、あるいはその素材などが語りかけるかのようなステージへと到達するのである。

このように遊びの始まりとされるイメージの構築は、まさに能動的、自主的な行為であり、自分が何であるか？ 何をしたいのか？ などの探求や、自分がじぶんであるという再認識が出来るものであろう。また佐伯が言うように「能動性は共感を呼ぶ」のである。自己理解を深めることは、必ず他者や取りまく環境についても理解を深めることとなるのである。

これまでに考えられていたような「遊び」に対する固定観念は、不道德な意味合いの「怠け」や「不謹慎さ」であろうが、おそらくその裏には、生産性を重んじ、結果ばかりを優先しようとする成果主義の意識が潜んでいるのではないだろうか。このような固定された概念を変更することはとても難しい。しかし子どもに対する認識においては、そろそろパラダイム転換を図る必要があるのではないだろうか。

「遊び」は、「学び」の大きな手立てでもありながら「遊び」本来の存在、すなわち独自性もあり、たくさんの側面を合わせ持っている。この存在感は、広く深い。だからこそ子どもだけではなく、人間全般を通しての論議に発展し、その結果として様々なことについて問題提起してくれるのであろう。

その4 結び

この研究報告を結ぶにあたり、あらためて本研究に客員研究員として参加する機会を与えていただいた青山学院女子短期大学総合文化研究所に感謝の意を表する。

そして本研究のコンビーナーである、子ども学科主任浅見均教授は、研究プロジェクト以前からの良き理解者であるとともに、今回の研究期間において本当にたくさんのご指導を頂いた。また森下春枝、渡部かなえ両教授にも、お二方から醸し出される優しい雰囲気とともに頂戴した多大なご理解とご支援、ならびに様々な観点からのご指導もまた、本研究における大きな成果であると感じている。

このプロジェクトにおける視察や講演会などの研究成果をあらためて振り返ると、研究として行った活動やそれによって得ることができた新しい成果や内容も無論、重要ではあるのだが、やはりそれをもとにして、これまで行ってきた子どもあるいはその周辺に関する研究についての確認やその他たくさんの事項についての課題などをあらためて見極めることができたことはやはり大きな収穫であったのではないだろうか。また本研究を通して、再び音楽家としての命題に向き合うことにもつながったのである。これは、一片の疑いも

なく自らが行っている研究におけるこれまでの方向性について確認できたことを意味し、今後も継続していく研究の将来的な視点についても確実なものとなりつつあることを実感している。

キーワードとして挙げた5つの事柄については、これからも研究を深めていく所存である。特に大海のように圧倒的にかつ必然性をもって存在する「遊び」というものに関しては、「空間」「時間」「身体」などのキーワードと関連させながら研究を継続していく予定である。

今後も、このような方向性をもって音（音楽）から見た子ども研究を引き続き行うことが、前段で紹介した命題を徐々に解決していく糸口となるということを信じてやまない。

A Study of Children's Expressions and Embodiment from the Perspective of Sounds and Music

Atsushi YOSHINAKA

The author believes that the various issues inherent in child care today originate in children's expressions and embodiment. This paper is an observational report that seeks to discover the relationship between the universal icon of the child and the region to which he or she belongs. It does so by examining the unique presence of children living in each region by focusing on embodiment, a keyword often used in previous research, as well as play and environment (including human environment).

While sharing some anecdotes during observations taken from his notes, the author also discusses the philosophy that forms the basis for child care and the issues within, from the perspective of auditory (i.e., musical) expression. Furthermore, the author explores the fundamental state of music that forms the basis of the paper.

Keywords : Expression, Body, Play, Environment, Image
